それをもう一度、今、
兄上よ、
私は此所に繰り返さう。
「老いたる父と盲ひたる兄と
いぢけたる子供――私の努力は
此の現實の闇の中より可能なる
光を探り出すことにある。」と。

雪　よ

雪よ、あなたは妖精の國の女王
而して又私の戀人。

幼い昔、
あの寒い山の峽間(はざま)で
あなたはよく私を訪れて來て呉れた。
圍爐裡火が赤々と燃えて
かぢかんだ手が次第に暖かく溶けて行く時、
而して、荒々しい風が

更け行く夜の沈默の中に、何時しか聲を潜めた時、
雪よ、あなたの優しい指は
靜かに、又靜かに
私の家の、古びた家の
表の扉をノックするのだつた。

あゝ、その時少年の胸は
抑へ切れぬ喜びに高鳴るのだ。
頑丈な父の腕に抱かれて
天井の闇から降りた自在鉤の
煤に躍る焔の群を眺めながら
私は耳を傾ける——
忍びやかなあなたの足音に、
微かなあなたの囁きに。

ぽか〳〵と暖まつた手足。
戸外に、又屋内に滿ち渡つた靜けさと平和。
疲勞は私の瞼を閉ぢさせる——薄れゆく光……

不圖私は自分の体が宙に浮くのを感ずる、
細い腕が、好く知つて居るその人の優しい腕が、
私の夢を温い臥床(ふしど)へと運んで行く。

× × ×

雪よ、あなたは今再び私の世界に現はれた、
昔のまゝの清い姿で。

消えかゝつて居た情熱は――あなたに對する
思慕の情は、再び大きな煽りを食つて
燃え上つて來た。
野性は再び私の胸に目覺めた。

私はあなたの純白な胸毛をば毟り取る、
そして冷いその塊を兩手に握つて
一滴、二滴、
したゝり落ちる愛のしづくを
凝乎と眺める、
桃色の淡い感觸を眼の底に味はひながら……